

【論文】

武者小路実篤テキストの生成

——童話劇「かちく山」を中心として——

寺澤 浩樹

概要…一九一七（大正六）年六月に「花咲爺」とともに執筆され、翌月の『白樺』に「かちく山と花咲爺」という総題で発表され、同年一〇月に『カチカチ山と花咲爺』というタイトルで阿蘭陀書房から刊行された、武者小路実篤の童話劇「かちく山」を対象とする、その原稿の一三七の修正、および初出誌との間の九四、初刊本との間の一二一、そして武者小路実篤全集との間の一九の異同の意味の検討によって、全集の定本に三六の要修正箇所があること、またそれらの中には、筆者の解釈による「かちく山」の主題や情調と関連するものが含まれていることがわかった。またその検討の過程で、武者小路のテキスト生成の意義と実態が明らかになると同時に、こうした独自の解釈に基づく定本の追求もまた、様々な文化的コンテキストの中であって生成される多様なテキストの一つと言わざるを得ないことも明らかになった。

キーワード…白樺、武者小路実篤、かちかち山、原稿、本文異同

一 はじめに

武者小路実篤の童話劇「かちく山」と「花咲爺」

二篇の自筆原稿は、一九八四（昭和五九）年に個人蔵

として展示された（次頁図1参照^{*1}）後に所在不明となっていたが、二〇〇四（平成一六）年に武者小路実篤記念館によって確保された。したがって、この原稿については、かつて研究の俎上に載せられたことはなく、

これら二篇が収録されている『武者小路実篤全集』第二巻（昭63・2、小学館。以後これを『全集』と呼ぶ）の解題にも触れられていない。

そのことを指摘しつつ、筆者は既刊の日本近代文学館編『近代文学草稿・原稿研究事典』（平27・2、八木書店）で、この「かち／＼山」を中心として、武者小路の自筆原稿に関する項目を執筆したが、その紙数の制約上、十分な調査、研究結果を発表することができなかった。本稿では、改めて「かち／＼山」を取り上げてそれを補うと同時に、原稿研究の枠組みを超えて、

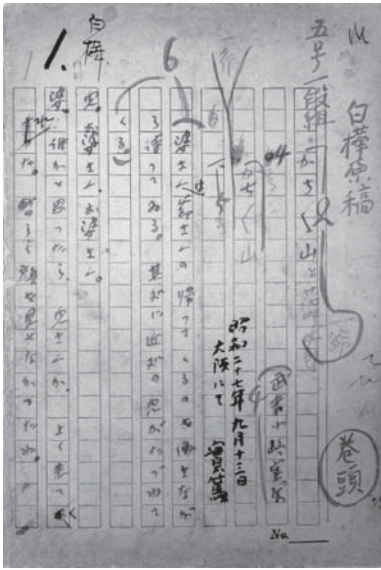


図 1

原稿から個人全集に至る武者小路実篤テキストの生成の問題を考察したい。

なお、武者小路の場合は、修正を施した原稿を、そのまま印刷に回していたようである。したがって、本稿ではこれを「草稿」と呼ばず「原稿」と呼ぶこととする。

最初に書誌的事項を述べる。「かち／＼山」は一九一七（大正六）年六月に「花咲爺」とともに執筆され（以後これを「原稿」と呼ぶ）、翌月の『白樺』に「かち／＼山と花咲爺」という総題で発表され（以後これを「初出誌」と呼ぶ）、同年一〇月に『カチカチ山と花咲爺』というタイトルで阿蘭陀書房から刊行された（以後これを「初刊本」と呼ぶ）。またその四年半後の一九二一（大正一〇）年一二月には、「地蔵と鬼」（『新潮』大9・5）を加えて新潮社から刊行された『童話劇三篇』に再録された（以後これを「再刊本」と呼ぶ）。『全集』収録本文は、この再刊本を底本としているが、これには初刊本と同一の鋳型が使われている。

以上のように、「かち／＼山」には原稿、初出誌、初刊本、『全集』の計四種類の本文と、原稿上の修正を含

めれば、四種類の修正や異同がある。

本稿ではこれらを丹念に比較、検討することで、理想的な定本、すなわち『全集』に収録されるべき本文を追究すると同時に、異同や修正の痕跡を手がかりに、「かちく山」の創作意図や、武者小路の文芸テクスト生成の実態と意義を考察する。

論述順序としては、最終的に『全集』で定本として確定された本文を検証するために、それ以前の本文を参照しながら、時間をさかのぼる方向、つまり最初に初刊本から『全集』への異同を、次に初出誌から初刊本への異同を、次に原稿から初出誌への異同を、そして最後に原稿執筆と修正の過程を検討する。

二 初刊本から『全集』へ

「かちく山」の初刊本と『全集』との間には、少なくとも一九の異同が見られた。その内訳は、多い順に「仮名・漢字等」が一〇例、「助詞等」が五例、「句読点」が三例、「表記」が一例であり、その三分の二ほどは初刊本で生じた誤植や、初刊本まで残存した誤記

の修正で、残り三分の一ほどは表記方法の変更などだが、その中に四例ほど『全集』で生じた変更もある。そこで次に、初出誌および原稿を参考にしながら、初刊本から『全集』への一九の異同の意味を一つずつ考えていきたい。

なお、ルビについては、初刊本が総ルビ、『全集』（および初出誌、原稿）はパラルビであるため、『全集』におけるパラルビの検証その他の場合を除き、これを異同とせず、またルビの表記もしない。

また、漢字については、『全集』の漢字表記方針に基づき、本稿では旧字体と新字体を区別しない。

表記の仕方については、まず異同ごとに作品冒頭部から連番を付した。続けて、最初に初刊本、次に『全集』の表記を記した。異同部分がわかりやすいように、それを含む周辺部分に傍線を付した。その後の（ ）内の数字は、それぞれ該当する（頁・行）を表し、『全集』については、当該箇所の場合、頁、段、行を漢数字で記した。

1 たづねてくる。(1・4) ↓ たづねてくる。(一 場六

○九頁上五行)、初刊本から句点の削除。初出誌(1・6)、原稿(1・7)ともに初刊本と同じく句点がある。おそらく、ト書きを示す()内の文末の句点は削除するという『全集』の編集方針によると思われるが、言うまでもなく、これは武者小路実篤後刊行であるから、作者の意志ではない。

2 わかたつて(14・3)↓わかたつて(一場六一二頁上二六行、促音修正。初出誌(8・3)、原稿(10・12)ともに『全集』と同じ。

3 おこらないのだ(15・9)↓おこらないのだ(一場六一二頁下七行、濁点修正。初出誌(9・1)、原稿(11・13)ともに『全集』と同じ。

4 反つた(16・2)↓反つて(一場六一二頁下一一行、助詞修正。初出誌(9・5)、原稿(11・17)ともに『全集』と同じ。

5 ついてゐる。(16・9)↓ついてゐる(二場六一二頁下一八行、1と同じく『全集』による句点削除。初出誌(9・9)、原稿(12・5)ともに初刊本と同じ。

6 おくたひれでせう(17・1)↓おくたひれでせう(二場六一二頁下二〇行、濁点修正。初出誌(9・12)、

原稿(12・7)ともに『全集』と同じ。

7 齢とつた(17・2)↓齢をとつた(二場六一二頁下一行、『全集』による助詞追加だが、初出誌(9・13)、原稿(12・8)ともに初刊本と同じなので、これは『全集』独自の変更と思われる。

8 ひとをあんまり疑はうものではありません。(22・4)↓ひとをあんまり疑ふものではありません。(二場六一四頁上八行、助動詞の削除だが、初出誌(12・12)、原稿(16・1)ともに初刊本と同じなので、これは『全集』独自の変更と思われる。

9 見へて(24・2)↓見えて(二場六一四頁下三行、送り仮名修正。初出誌(13・10)、原稿(17・11)ともに初刊本と同じで、誤記が続いていた。

10 柵(27・9)↓柵(二場六一五頁上二六行、誤字修正。初出誌(15・10)、原稿(20・4)ともに『全集』と同じ。

11 見へなかつた(35・4)↓見えなかつた(三場六一七頁上三行)、9と同じく送り仮名修正で、初出誌(19・11)、原稿(25・13)ともに誤記が続いていた。

12 外で狸の聞(36・7)↓外で狸の声(三場六一七頁上一八行、誤字修正。初出誌(20・9)、原稿(26・10)と

もに『全集』と同じ。

- 13 命の恩人と(40・3)↓命の恩人だと(四場六一八頁下八行)、助動詞の追加だが、初出誌(22・8)、原稿(28・19)ともに初刊本と同じなので、これは『全集』独自の変更と思われる。

- 14 恐れ入ります(50・3)↓恐れ入ります(六場六二二頁上四行)、送り仮名修正。初出誌(28・5)、原稿(35・16)ともに『全集』と同じ。

- 15 嫌ひたから(55・1)↓嫌ひだから。(六場六二二頁上二二行)、濁点の修正。なお初出誌(30・13)、原稿(39・9)ともに濁点はあるが、「嫌ひ」はともに「嫌い」の表記だった。これについては後の節でも触れる。

- 16 草叢がある。(58・3)↓草叢がある(七場六二三頁上六行)、1、5と同じく『全集』による句点削除。初出誌(32・10)、原稿(41・16)ともに初刊本と同じ。

- 17 いいが(58・3)↓いい、が(七場六二三頁上四行)、踊り字への変更。初出誌(33・2)も「いいが」だったが、これは行頭の踊り字表記を避けたためなので、もともと原稿(42・9)は踊り字だった。

- 18 殺されないでもすんだらう(64・9)↓殺されないで

すんだらう(七場六二四頁下三行)、助詞の省略だが、初出誌(36・13)、原稿(46・14)ともに初刊本と同じなので、これは『全集』独自の変更と思われる。

- 19 幕(二七、六、五)(69・10)↓(幕)一九一七、六、五(七場六二五頁下二〇行)、戯曲末尾の「幕」と脱稿日の表記の変更。なお、初出誌(39・13)は「幕」(一七、六、五)」、原稿(50・10)は「幕」(一七、六、五)」と記されている。

以上、「かちく山」の初刊本と『全集』との間の一九の異同を見てきた。作者没後に編集・刊行された、この『全集』の本文確定については、明らかな誤記や誤植を除き、初刊本までの本文が尊重されるべきであることは、言うまでもない。

そこで、前記の三つを含む以下の四ヶ所については、『全集』本文を、矢印以降の表記に改めるべきと思われる。なお、引用と傍線は最小限にとどめる。

- 7 齢をとつた↓齢とつた(二場六一二頁下二二行)
8 疑ふもの↓疑はうもの(二場六一四頁上八行)

13 命の恩人だと↓命の恩人と(四場六一八頁下八行)
18 ないで↓ないでも(七場六二四頁下三行)

これらの中でも、8、13、18の三つは、「かちく山」の筆者の解釈による〈信頼〉の主題や〈悲壯を帯びた歓喜〉という情調への関係が深いものである。このことは後にまた触れる。

三 初出誌から初刊本へ

発行日が迫る中、短い校正期間を経て、急いで発表されることの多い初出誌の本文に比べて、いくつかの作品がまとめられて刊行される初刊本の本文には、比較的時間をかけて、作者自身による誤植や表現の修正がおこなわれることが多い。

こうした修正と思われる変更を含め、「かちく山」の初出誌と初刊本との間には、少なくとも一二一の異同が見られた。その内訳は、多い順に「仮名・漢字等」が五二例、「助詞等」が二二例、「句読点」が二二例、また分類基準が少し異なるが、「表現」が一七例、「敬

語」が一〇例である。これらのおおむねは誤植の訂正と思われるものなどであるが、「表現」や「敬語」を含むその他の四分の一ほどの中には、表現や文脈に関わる異同もある。

そこで次に、原稿を確認しながら、これら初出誌から初刊本への異同の意味を、一つずつ考えていきたい。

表記の仕方については、まず異同ごとに作品冒頭部から連番を付した。続けて、最初に初出誌、次に初刊本の表記を記した。異同部分がわかりやすいように、それを含む周辺部分に傍線を付した。その後の()内の数字は、初出誌、初刊本それぞれの該当する(頁・行)を表す。なお、初出誌と原稿の表記が同一である場合は、初出誌の「頁・行」に続けて、原稿当該箇所のを記した。また初刊本の「頁・行」に続けて『全集』当該箇所の場合、頁、段、行を漢数字で記した。

1 たつしやにしてゐるよ。(1・15、1・12)↓たつしやにしてゐるよ、(2・6、一場六〇九頁上二三行)、句点を読点に変えたことで速度が上がった。
2 い、が(2・2、1・17)↓おもしろいが(2・9、一場

六〇九頁上一七行)、敬語。兎から爺へ、正しく敬意が上がつた。

3 それは氣の毒だが(2・5、2・4)↓それでは氣の毒だが(3・3、一場六〇九頁下三行)、助詞の変更。文意がより自然になった。

4 行つて来ます(2・8、2・10)↓行つて参ります(3・5、一場六〇九頁下八行)、敬語。兎から婆へ、正しく敬意が上がつた。

5 かわらず(2・11、2・13)↓かはらず(3・11、一場六〇九頁下一行)、仮名遣いは「変はる」が正しい。

6 親切ものだよ(2・11、2・14)↓親切ものだ(3・11、一場六〇九頁下一行)、助詞。婆の独白から「よ」を削除して簡略化された。

7 よく帰つて来たね(3・1、2・20)↓よく帰つて来なさつた(4・6、一場六〇九頁下一七行)、敬語・助詞。婆から爺へ、敬語化と助詞の略によって、正しく敬意が上がつた。

8 たらうね(3・1)↓だらうね(4・6、一場六〇九頁下一七行)、濁点修正。原稿(3・1)は初刊本と同じ。

9 い、土産物をもつて帰つて来てやつたよ(3・2、

3・3)↓い、土産物をもつて帰てやつたよ(4・8、一場六〇九頁下一九行)、初刊本の「来て」の省略には、帰ったこと自体よりも、土産物への注意を際立たせたように感じられる。なお、促音「つ」の脱字は誤植だろう。『全集』でも初刊本の表記のまま。

10 やう御座いましたね(3・6)↓よう御座いましたね(5・1、一場六〇九頁下二三行)、仮名遣い修正。「よう」が正しい。原稿(3・10)は初刊本と同じ。

11 たすけて下されば(4・5、4・13)↓たすけて下されば、(6・10、一場六一〇頁上一七行)、読点が加えられて文節が短くなった。

12 あてになるかならないかわからないかね(4・14)↓あてになるかならないかわからないからね(8・3、一場六一〇頁下六行)、脱字修正。なお原稿(5・15)は「からな」で、これについては後の節でも触れる。

13 可哀さうにもなるね(5・2)↓可哀さうにもなるね(8・7、一場六一〇頁下一〇行)、助詞省略だが、文脈上は助詞がある方が良く、原稿(5・20)でも「にもなるな」とあるので、脱字の可能性が高い。

14 帰つてゐらつしたよ(5・6、6・8)↓帰つてゐら

- しつたよ(9・1、一場六一〇頁下一五行)、表現修正。
「いらしつた」は当時東京山手で使われていた。
- 15 こわく(5・14、7・1)↓こはく(10・1、一場六一
頁上一行)、仮名遣い修正、「こは」が正しい。
- 16 失えてゆく(6・3、7・11)↓消えてゆく(10・6、一
場六一頁上三三行)、漢字の変更。なお原稿には「消
を消した跡も見える。
- 17 ゐれて飼つておくか(6・8)↓入れて飼つておく
か(11・3、一場六一頁下八行)、誤字修正。原稿(8
・3)も、初出誌と同じ誤字だった。
- 18 わるいことをしたら(6・13、8・9)↓わるいこと
をしたら、(11・8、一場六一頁下二三行)、長文に
読点が追加され、読みやすくなった。
- 19 しませんでしたら(6・14、8・12)↓しませんでした
たら、(11・10、一場六一頁下一五行)、読点の追加
と同様に読みやすくなった。
- 20 ゆはいつけて(7・2、8・20)↓ゆはひつけて(12・
3、一場六一頁下一九行)、仮名遣いの修正。「ゆ
はひ」が正しい。
- 21 嘘つく(7・4、9・3)↓嘘をつく(12・5、一場六一
頁下二二行)、助詞「を」の追加で、より正しい言
い方となった。
- 22 うたがい深い(7・7、9・8)↓うたがひ深い(12・
8、一場六一頁下二五行)、仮名遣いの修正。「う
たがひ」が正しい。
- 23 喰はれやしないかと(7・7、9・9)↓食はれやし
ないかと(12・9、一場六一頁下二六行)、漢字修正。
後の例では「喰」は「くら(ふ)」の読みのようだ。
- 24 まがある逃げやうとしますよ(7・7、9・9)↓
すぎがあると逃げやうとしますよ(12・9、一場六一
頁下二六行)、「ま(間)」から「すぎ(隙)」への表
現の変更。よりわかりやすくなったと思われる。
- 25 本当に逃がしてやつても(7・8、9・11)↓本当は
逃がしてやつても(12・10、一場六一頁上一行)、助
詞の変更。より自然な心情表現になったと思われる。
- 26 ゆわいつけて(7・12、9・19)↓ゆはひつけて(13・
5、一場六一頁上七行)、20に同じく「ゆはひ」へ
仮名遣いが修正された。
- 27 わかつたつて(8・3、10・12)↓わかつつて(14・3、
一場六一頁上一六行)、初刊本で促音脱字の誤植。

『全集』では修正されている。

28 おこらないのだ(9・1、11・13)↓おこらないのだ(15・9、一場六二二頁下七行)、初刊本で濁点欠落の誤植。『全集』では修正されている。

29 くいそこね(9・4、11・16)↓くひそこね(16・1、一場六二二頁下一〇行)、仮名遣いの修正。「くひ」が正しい。

30 くいそこね(9・5、11・17)↓くひそこね(16・2、一場六二二頁下一二行)、29に同じく「くひ」へ仮名遣いの修正。

31 だが反つて気持はい、(9・5、11・17)↓だが反つた気持はい、(16・2、一場六二二頁下一二行)、初刊本の誤植。『全集』では修正されている。

32 足をあらう水(9・6、11・19)↓足をあらふ水(16・4、一場六二二頁下二三行)、仮名遣いの修正。「あらふ」が正しい。

33 おくたびれでせう(9・12、12・7)↓おくたひれでせう(17・1、二場六二二頁下二〇行)、初刊本で濁点欠落の誤植。『全集』では修正されている。

34 年とつた(9・13、12・8)↓齢とつた(17・2、二場六

一二頁下二二行)、他の例に合わせて「齢」に修正された。なお既述の通り『全集』では「齢をとつた」と「を」が補われている。

35 思つてゐます(10・7、13・7)↓思つてをります(18・2、二場六二二頁上九行)、狸から婆への敬意が上げられた。

36 あなたがたが(10・8、13・9)↓あなたが(18・4、二場六一三頁上一二行)、狸の台詞。初刊本で「がた」を省き、単数「あなた」に改められた。だが、少し後に「あなた方」という表記もある。

37 お手つだいが(10・9、13・12)↓お手つだひが(18・6、二場六一三頁上二三行)、仮名遣いの修正。「手つだひ」が正しい。

38 (泣く真似する)(11・1、14・2)↓(泣き真似する)(19・5、二場六一三頁上二三行)、ト書きの言葉。表現の修正により、狸の芝居気を強めたか。

39 米をついて(11・3)↓米をついて(19・7、二場六一三頁上二四行)、不要な傍点が削除された。後述するが、原稿(14・5)は「も、ち」のために傍点があった。

40 いやく(11・14、15・1)↓いやく。(20・9、二場

六一三頁下一一行)、句点の追加により、台詞に間が置かれた。

41 狸、どうも(12・5)↓狸。どうも(21・6、二場六一三頁下二二行)、話者名を示す句点への修正。原稿(15・9)は初刊本と同じ。

42 いやぢやない(12・7、15・13)↓おいやぢやない(21・10、二場六一四頁上三行)、狸から婆への敬意が正しく上げられた。

43 ゆわいて(12・14、16・5)↓ゆはひて(22・6、二場六一四頁上一〇行)、仮名遣い「ゆはひ」が正しい。

44 かけませぬ(12・14)↓かけません(22・7、二場六一四頁上一一行)、撥音便への修正。原稿(16・6)は初刊本と同じ。

45 疑ひ深かくいらつしやいますね(12・15、16・7)↓疑ひ深くつてゐらしやいますね(22・8、二場六一四頁上一二行)、送り仮名および助詞が修正された。

46 苦しめて(13・4、16・16)↓苦しめになつて(23・3、二場六一四頁上一八行)、狸から婆への敬意が正しく上げられた。

47 損してゐらつしやる(13・4、16・17)↓損してゐら

しやる(23・3、二場六一四頁上一八行)、本文直前に「思つてゐらつしやる」の例があり、初刊本での誤植と思われる。『全集』にもこの誤植が引き継がれてしまっている。

48 狸奴又人をばかさうと(13・9、17・7)↓狸の奴又人をばかさうと(23・11、二場六一四頁上二六行)。原稿では「奴」に「め」のルビが付されている。「狸奴」「狸の奴」ともに本文中に他の用例があり、ここでは変更によつて、より聞き取りやすくなったものか。

49 しばつておかなくともしもの時(14・14、19・6)↓しばつておかなくともしもの時(26・6、二場六一五頁上二行)、読点で文が正しく区切られた。

50 かまいません(15・1、19・11)↓かまひません(26・10、二場六一五頁上六行)、仮名遣いの修正。「かまひ」が正しい。

51 ゆわく(15・9、20・3)↓ゆはく(27・8、二場六一五頁上一五行)、仮名遣いは「ゆはく」が正しい。

52 柵の間から手を(15・10、20・4)↓柵の間から手を(27・9、二場六一五頁上一六行)、初刊本の誤植。『全集』では「柵」に戻された。

- 53 ゆわく(15・10、20・6)↓ゆはく(27・9、二場六一五頁上二六行)、51同様に「ゆはく」の仮名遣い修正。
- 54 ゆわいつけて(16・2、20・15)↓ゆはへつけて(28・6、二場六一五頁上二四行)、下に「つけて」が続く、26と同様の「ゆはひ」への仮名遣い修正だが、この例のみ「ゆはへ」と下二段活用である。
- 55 ゆわいて(16・3、20・18)↓ゆはひて(28・7、二場六一五頁上二五行)、43同様に「ゆはひ」へ仮名遣い修正。
- 56 働ける身しん體しながら(16・6、21・2)↓働ける身しん體をしながら(29・1、二場六一五頁下四行)、助詞を追加してわかりやすくしたか。なお、原稿では「働ける身しん體して」の(おそろく)「て」を消し、「ながら」を加えている。
- 57 貰います(16・8)↓貰ひます(29・5、二場六一五頁下八行)、仮名遣いの修正。「貰ふ」が正しい。なお、後述するが原稿(21・7)では「貰」は平仮名表記。
- 58 信用してはくれない。(16・12、21・13)↓信用してはくれない、(29・10、二場六一五頁下二三行)、句点から読点への修正。この58から後の60までは、狸の台詞中の同様の修正が続くが、初刊本では、読点で
- 59 文をつなげていくことで、間接話法的な台詞に勢いを持たせたと考えられる。
- 60 殺される許りだ。(16・12、21・14)↓殺される許りだ、(29・11、二場六一五頁下二四行)、58に同じく、間接話法的な読点への修正。
- 61 ものはない(16・12)↓ものはない、(30・1、二場六一五頁下一五行)、読点の追加。初出誌の句読点欠落は行末のためだが、58、59に同じく原稿(21・15)は句点で、同様の修正であろう。
- 62 命でもすてやうと云ふ氣であるから。(17・9、22・17)↓命でもすてやうと云ふ氣であるからね。(31・6、二場六一六頁上二二行)、助詞を付加。婆が狸に兎の偉さを、より強調するニュアンスに変った。
- 63 すくいたおす(17・14、23・6)↓すくひたはす(32・2、二場六一六頁上一八行)、仮名遣いの修正。「すくひ」が正しい。
- 64 婆を足でふみつけ(18・1、23・8)↓婆を足でふみつけて(32・4、二場六一六頁上二二行)、助詞を付加。動作とその結果の状態が明示された。
- 65 この杵であなを殺さうと、生かさうと(18・2)↓

この杵であなたを殺さうと生かさうと、(32・5、二場六一六頁上二三行)、読点が後ろに移動し、読みやすくなった。原稿(23・10)は「と」と「も」の違いはあるが、読点の位置は初出誌と同じ。

65 こうなれば(18・2、23・10)↓かうなれば(32・6、二場六一六頁上二三行)、仮名遣いの修正。「かう」が正しい。

66 お前は、(18・4、23・13)↓お前は(32・8、二場六一六頁上二五行)、読点が省かれたが、狸に逆襲された婆の緊張を考えれば、読点の意義も大きいと思われる誤植の可能性も考えられる。

67 おいつかない(18・14、24・9)↓おひつかない(33・8、二場六一六頁下一〇行)、仮名遣いの修正。「おひ」が正しい。

68 爺さん、兎、助けて！(19・1、24・11)↓お爺さん、兎、助けて！ 人殺しい！(33・10、二場六一六頁下一三行)、「爺さん」に接頭語「お」が、および「人殺しい」が追加され、殺人の緊迫感が強調された。

69 年とつて(19・9、25・9)↓齡とつて(34・10、三場六一六頁下二二行)、年齢を表すのにふさわしい「齡」

に改められた。

70 婆をお怒らしたので(20・4、26・1)↓婆をお怒らしたのか(35・11、三場六一七頁上一〇行)、狸を殺した説明が、理由から推測に変更され、表現に含みもたらされたと考えられる。

71 外で狸の聲(20・9)↓外で狸の聞(36・7、三場六一七頁上一八行)、明らかな漢字誤植で、原稿(26・10)は初出誌と同じ。『全集』で「声」に戻された。

72 くづれる(21・5、27・7)↓くづれる(37・9、三場六一七頁下一六行)、仮名遣いの修正。「くづれる」が正しい。

73 おあいになつた(21・10、27・14)↓おあひになつた(38・4、三場六一七頁下二二行)、仮名遣いの修正。「あひ」が正しい。

74 やすもう(22・2、28・5)↓やすまう(39・5、四場六一八頁上一〇行)、仮名遣いの修正。「やすま」(う)が正しい。

75 足もとにもおよばないよ(22・14、29・8)↓足もとにもよりつけないよ(40・10、四場六一八頁下一五行)、狸の言葉。表現が誇張されたと考えられる。

76 こうやつて(23・6、30・1)↓かうやつて(41・8、四場六一八頁下二四行)、65に同じく、仮名遣いの修正。「かう」が正しい。

77 疑がはないことはない(23・15)↓疑がはないことはない。(42・9、四場六一九頁上一〇行)、句点の追加。初出誌の句点欠落は行末のため。原稿(30・18)は初刊本と同じ。

78 無理もない。無理がない處か(24・2、31・1)↓無理がない。無理はない處か(42・11、四場六一九頁上一二行)、狸の虚言に同意のふりをする兎の言葉。それぞれ「が」と「は」への変更によって、道理の流れがより強調されたものと感じられる。

79 憎んでゐるわけだからね。(24・4、31・7)↓憎んでゐるわけだからね。(43・3、四場六一九頁上一五行)、明らかな誤植。『全集』では修正された。

80 なに遠慮はいらない。(25・11、33・1)↓なに遠慮はいらないよ。(45・9、四場六一九頁下一七行)、兎が狸を舟遊びの計略に誘う台詞。終助詞「よ」の追加によって、狸への媚態の演技が感じられる。

81 焼いてやれ。狸さん(26・1、33・12)↓焼いてやれ。

(大声を出し) 狸さん(46・5、四場六一九頁下二四行)、ト書きの追加によって、狸への距離と兎の感情が表されたと考えられる。

82 兎おいつく(26・4、33・16)↓兎おひつく(46・10、五場六二〇頁上三行)、仮名遣いの修正。「おひ」が正しい。

83 お前がお花を持つて(27・15、35・8)↓お前が花を持つて(49・8、六場六二〇頁下二三行)、爺から兎への台詞。「お」の削除により丁寧度が下げられた。

84 どうした。お前が親切にしてくれるので、(28・3、35・13)↓かうしてお前が親切にしてくれるので、(50・1、六場六二二頁上二行)、ト書き「(兎花をそなへおじぎする)」に続く爺の台詞だが、兎への問いかけが削られ、音の似た別の言葉に変えられた結果、わかりやすくはなった。しかし後の103に関わる、別の意味があつたようだ。これについては後述する。

85 嬉しいか知らない(28・3、35・14)↓嬉しいか知れない(50・2、六場六二二頁上三行)、文脈上、より自然な自発表現に改められた。

86 恐れ入ります(28・5、35・16)↓恐り入ります(50・

3、六場六二一頁上四行)、初刊本の誤植であろう。
『全集』では「恐れ」に戻された。

87 あつては(28・6、35・20)↓おあひになつては(50・5、六場六二一頁上六行)、兎から爺への敬意が正しく上げられた。

88 云つたさうだが(28・8、36・3)↓云つたとき(50・7、六場六二一頁上八行)、過去の伝聞が事実に変えられた。文脈上はそれが正しく思われる。

89 ころげまわつて(28・14、36・13)↓ころげまはつて(51・3、六場六二二頁下二行、仮名遣いの修正。「まは」(る)が正しい。

90 し(が)し御安心なさい。(28・15)↓しかし御安心なさい。(51・5、六場六二二頁下七行)、濁音の誤植。原稿(36・16)は初刊本と同じ。

91 狸奴を(28・15、36・17)↓狸の奴を(51・6、六場六二一頁下八行)、48に同じく、変更によって、より聞き取りやすくしたものか。

92 ゐます(29・3)↓ゐます。(51・9、六場六二一頁下二行)、句点の追加。初出誌の句点欠落は行末のため。原稿(37・1)は初刊本と同じ。

93 かけます(29・4)↓かけます。(51・11、六場六二二頁下一四行)、句点の追加。初出誌の句点欠落は行末のため。原稿(37・3)は初刊本と同じ。

94 承知したか(29・5、37・4)↓承知したのか(52・1、六場六二二頁下一五行)、爺から兎への問い。助詞の追加により、疑問が強調された。

95 辛しを(29・7、37・7)↓辛子を(52・4、六場六二二頁下一八行)、原稿時からの略記を正したもの。

96 ぬられたりしても(29・7、37・8)↓ぬられたりして(52・4、六場六二二頁下一八行)、助詞の省略だが、原稿や初出誌の方がわかりやすく思われるので、脱字誤植の可能性もある。『全集』も省略のまま。

97 兎のやうな馬鹿にだまされる(29・9、37・11)↓兎のやうな馬鹿ものにだまされる(52・7、六場六二二頁下二行)、直前に「自分のやうな利口なもの」とあり、それに対応させたか。

98 大得意です(29・13)↓大得意です。(53・3、六場六二二頁上二行)、句点の追加。初出誌の句点欠落は行末のため。原稿(37・20)は初刊本と同じ。

99 位いです(30・4、38・10)↓位です(53・10、六場六二

二頁上九行)、送り仮名が修正された。

100 しまうまで(30・7、38・19)↓しまふまで(54・5、六場六二頁上一五行)、仮名遣いの修正。「しまふ」が正しい。

101 嫌いだから。(30・13、39・9)↓嫌ひたから。(55・1、六場六二頁上二二行)、仮名遣いの修正。「嫌ひ」が正しい。ところが初刊本では「だ」の濁点が欠落。『全集』ではすべて修正されている。

102 見てゐてやるから。しつかりやつてくれ。(31・7、40・7)↓見てゐてやるから、しつかりやつてくれ。(56・3、六場六二頁下一〇行)、句点が読点に改められ、より自然な文となったと思われる。

103 さつき申しましたが、(31・10、40・14)↓さつき申しましたが。(56・7、六場六二頁下一五行)、読点の方が自然とも思われるが、あえて句点を用いたことで、兎の返事には、前記84の「どうした」という爺の問いかけに関わる、別の意味が込められたと思われる。これについては後にまた触れる。

104 (爺さんあととおく) (57・9、六場六三頁上二行)、助あとおく(る) (57・9、六場六三頁上二行)、助

詞の省略はト書き的ではあるが、改められた。

105 こちらがはが河原になつてゐて(32・10、41・14)↓こちらがは、河原になつてゐて(58・1、七場六二三頁上四行)、ト書きの一部。格助詞「が」から「は」への変更によって、指示性が弱められている。

106 小さい舟が二艘(32・10、41・14)↓小さな舟が二艘(58・2、七場六二三頁上五行)、ト書きの一部。物理的に「小さい舟」ではなく、比較的「小さな舟」である、というニュアンスの表現か。

107 にほひ(32・13、42・4)↓にほひ(58・8、七場六二三頁上一一行)、仮名遣い修正「にほひ」が正しい。

108 好きな方を上げます。(33・7、42・17)↓好きな方を上げませう。(59・5、七場六三頁上一九行)、兎が狸に舟を選択させる台詞。より意志的、勧誘的になった。

109 もらうかな(33・8、42・20)↓もらふかな(59・7、七場六二三頁上二二行)、仮名遣いの修正。「もらふ」が正しい。

110 にほひ(33・10、43・4)↓にほひ(59・10、七場六二三頁上二四行)、107に同じく仮名遣い修正。

111 さうするかね(33・12)↓さうするかね(60・1、七場

六二三頁下二行)、仮名遣いの誤植。原稿(43・7)が誤字だったものが初出誌で直されたものの、初刊本で再び誤字となった。『全集』もこの誤りのまま。

112 まあどうせ。食ひたい時食へるのですから。(34・

1)↓まあ。どうせ食ひたい時食へるのですから。(60・5、七場六二三頁下六行)、句点位置の移動。兎が泥舟を選び始めた狸をなだめる時の台詞で、強いて言えば、その微妙な心理的駆け引きが、句読点の位置や種類の変更に表れているとも言えるが、原稿(43・14)では初出誌と同じ位置にあったのは読点だった。これについては後に再び触れる。

113 もう一つ食べて見ないとよくはわからないね(34・

5、43・20)↓もう一つ食べて見ないとよくわからないね(60・9、七場六二三頁下一〇行)、係助詞省略。

狸が泥舟の料理味見の台詞だが、省略によって理屈ぼさがなくなった反面、意地汚さも弱まったようだ。

114 どうです、具合は。(34・15、44・16)↓どうです。具

合は。(61・11、七場六二三頁下二三行)、読点が句点に変えられたが、倒置文なので、読点の方が良いと

も思われる。

115 利口ぢやなけりやあ(37・2、46・20)↓利口でなけ

りやあ(65・3、七場六二四頁下八行)、「で」に改められたことで「利口」がより明瞭化されている。

116 舟棹を(37・6、47・6)↓舟の棹を(65・7、七場六二

五頁上一行)、ト書きの一部。助詞「の」が追加されて、指示対象がより明瞭となった。

117 (酒を出す)(38・9、48・15)↓(ねながら酒を出

す)(67・8、七場六二五頁上二三行)、ト書きの一部。狸の酔態が強調されている。

118 長くはない(38・15)↓長くはない。(68・4、七場六

二五頁下四行)、句点の追加。初出誌の句点欠落は行末のため。原稿(49・4)は初刊本と同じ。

119 兎、櫂をふり上げる。同時に(39・11、50・7)↓兎、

櫂をふり上げる、同時に(69・7、七場六二五頁下一八行)、ト書きの一部。句点を読点に変更し、動作の速度が上げられたように感じられる。

120 ひらひいて(39・11)↓ひらいて(69・8、七場六二五

頁下一八行)、誤植修正。原稿(50・8)は初刊本と同じ。

121 (幕)(二七・六・五)(39・13)↓幕(一七・六・五)

(69・10、七場六二五頁下二〇行)、幕と脱稿日の表記の変更。前節で触れたように、『全集』でも少し変えられている。原稿(50・10)は初出誌に最も近い。

以上、「かち／＼山」の初出誌と初刊本との間の一二の異同を見てきた。これらの中でも、初刊本の改変が比較的大きかった、表現や文脈に関わる次の四例を、代表的な異同として挙げておきたい。はじめが初出誌の表記で、傍線部が異同部分である。参考のため、『全集』の該当頁等を漢数字で示す。

68 爺さん、兎、助けて！↓お爺さん、兎、助けて！

人殺しい！(二場六一六頁下一三三行)

81 焼いてやれ。狸さん↓焼いてやれ。(大聲を出し)

狸さん(四場六一九頁下二四行)

84 どうした。お前が親切にしてくれるので、↓かう

してお前が親切にしてくれるので、(六場六二二頁上

二行)

88 云つたさうだが↓云つたとき(六場六二二頁上八

行)

ここで、右の84についてのみ、少し述べておきたい。

すでに触れたように、この台詞は「(兎花をそなへおじぎする)」という卜書きに続く爺の言葉だが、元の「どうした。」とは、兎の祈りの様子に何かを感じた爺の問いかけであろう。その何かは、後の¹⁰³の兎の言葉「さつき申しましたが」によって明らかとなる。つまり、兎は亡き婆に対して、泥舟の狸が溺れる様子を、爺と一緒に見ていることを祈ったのだと思われる。けれども作者は、いくらかわかりにくいその心情のやり取りをやめ、「かうして」に単純化し、代って「さつき申しましたが。」と、その後にあえて句点を置くことで、兎のその返答に重みを持たせたと考えられる。演技の場では、句点の後に重い間が置かれることであろう。さて、詳細は省くが、以上の検討から、以下の五ヶ所については、『全集』本文を矢印以降の表記に改めるべきと思われる。引用と傍線は最小限にとどめる。

9 帰て↓帰つて(一場六〇九頁下一九行)

13 になるね↓にもなるね(一場六一〇頁下一〇行)

47 らしやる↓らつしやる(二場六一四頁上一八行)

- 96 たりして↓たりしても（六場六二頁下一八行）
 111 そうする↓さうする（七場六二三頁下二行）

四 原稿から初出誌へ

締切に追われ、急いで書かれることの多い原稿だが、初出誌掲載までの短い期間には、ゲラ刷りによる校正作業がおこなわれる。作者は、その機会にゲラの誤植のみならず、いくらかの本文修正も施すだろう。

「かちく山」の原稿と初出誌との間には、少なくとも九四の異同が見られた。その約半分の四六が修正、四二が誤植と思われるが、どちらか判断が難しいものが六例ほどあった。

修正ないしそれらしいもの計五二例の内訳は、多い順に「仮名・漢字・ルビ等」が一九例、「助詞等」が一三例、「表現」が一例、「句読点」が六例、「素材」が三例である。

また、誤植と思われる四二例のうち、初刊本での修正などを除く二六例は、『全集』にそのまま残されている。これについては後にまとめて記す。

表記の仕方については、まず異同ごとに作品冒頭部から連番を付した。続けて、最初に原稿、次に初出誌の表記を記した。異同部分がわかりやすいように、それを含む周辺部分に傍線を付した。その後の（ ）内の数字は、それぞれ該当する（頁・行）を表し、初出誌の「頁・行」に続けて、『全集』の当該箇所の場合、頁、段、行を漢数字で記した。

- 1 ナシ（1・3）↓（この一篇をある小学校の先生に）
 （1・4、六〇九頁上二行）、初出誌で題辞追記。
- 2 一、（1・4）↓一（1・5、一場六〇九頁上三行）、原稿には場を示す数字の下に読点があった。初出誌では二場以外すべて脱落している。
- 3 帰ってくる（1・5）↓帰ってくる（1・6、一場六〇九頁上四行）、漢字に改められた。
- 4 それはいけないね。お爺さんも（1・11）↓それはいけないね、お爺さんも（1・10、一場六〇九頁上一〇行）、読点に変えられたが、誤植と思われる。
- 5 あれが困つてゐる時に助けてやつた（2・14）↓あれが川におちたのを助けてやつた（2・11、一場六〇

- 九頁下二行)、校正で表現が具体化された。
- 6 だらうね(3・1)↓たらうね(3・1、一場六〇九頁下二行)、初出誌のみ誤植、初刊本で修正された。
- 7 立派な狸ですね。(3・5)↓立派な狸だね。(3・3、一場六〇九頁下二〇行)、婆から爺への台詞。敬体から常体に変えられた。修正だろうか。
- 8 よう御座いましたね(3・10)↓やう御座いましたね(3・6、一場六〇九頁下二三行)、初出誌のみの誤植、初刊本で「よう」に修正された。
- 9 お前の根生は(4・16)↓お前の根性は(4・6、一場六一〇頁上一八行)、原稿の誤字が修正された。
- 10 それだけのことは(4・19)↓それだけの事は(4・8、一場六一〇頁上一二行)、他の例が平仮名であり、また漢字化の意義が薄いため、誤植と考えられる。
- 11 許してやつてもいいが。(5・14)↓許してやつてもいいが、(4・14、一場六一〇頁下五行)、読点の方が文のリズムが良いため、修正と思われる。
- 12 あてになるかならないか。(5・14)↓あてになるかならないか(4・14、一場六一〇頁下六行)、主語を明示する格助詞の省略。修正か誤植か、微妙である。
- 13 わからないからな。(5・15)↓わからないかね。(4・14、一場六一〇頁下六行)、初出誌のみ誤植。初刊本で「ら」が補われたが、文末は「ね」のままである。
- 14 腹も立つが、この(5・19)↓腹も立つがこの(5・2一場六一〇頁下九行)、読点があつた方が自然に感じられるため、誤植と思われる。
- 15 この態を見ると、(5・20)↓この態を見ると、(5・2一場六一〇頁下九行)、初出誌でルビ欠落。総ルビの初刊本、パラルビの『全集』では付けられた。
- 16 可哀さうにもなるな(5・20)↓可哀さうにもなるね(5・2、一場六一〇頁下一〇行)、爺の台詞の終助詞が「な」から「ね」に変えられることは多いようだ。なお初刊本では、さらに「も」が削除された。
- 17 おかげで(6・12)↓おかげで(5・9、一場六一一頁上四行)、原稿の誤記が修正された。
- 18 見てはねられる(6・15)↓見てはねられる(5・10、一場六一一頁上六行)、校正時に傍点を付したか。
- 19 生かしてくだされば、私は(7・6)↓生かしてくだされば私は(5・15、一場六一一頁上一七行)、初出誌の句点欠落は行末のためだが、初刊本から『全集』

までそれを踏襲し、欠落のままである。

20 どんなに感謝するか(7・6)↓どんなに有難がるか(6・1、一場六一一頁上二七行)、表現の修正。

21 失えてゆくからな。(7・11)↓失えてゆくからな。

(6・3、一場六一一頁上二四行)、爺の台詞の修正。なお「失」は初刊本で「消」に改められた。

22 喰ひたくないからな。(7・16)↓喰ひたくないからな。(6・5、一場六一一頁下三行)、爺の台詞の修正。

23 かごにでも(8・3)↓小屋にでも(6・8、一場六一一頁下八行)、原稿で漏れた修正をおこなったか。だとすれば、後の兎の台詞「かごに入れたりすると」も「小屋」に修正されるべきであったかもしれない。

24 よろこんでみましたか。(10・2)↓よろこんでましたか。(7・13、一場六一二頁上九行)、脱字の誤植。

25 戴けるかとそれ許り(12・20)↓戴けるかそれ許り(10・4、二場六一三頁上六行)、脱字の誤植であろう。

26 ありがたく思つて(13・4)↓ありがたく思ふて(10・6、二場六一三頁上八行)、他に「思ふて」の例はなく、誤植と考えられる。

27 ですがね。(14・2)↓ですかね。(11・1、二場六一三頁上二三行)、文脈上正しく疑問形に修正された。

28 まつておいで。どれ、(14・5)↓まつておいで、どれ、(11・2、二場六一三頁上二四行)、文のつながり方は句点の方が適切と考えられるので、誤植か。

29 もちをついて(14・5)↓米をついて(11・3、二場六一三頁上二四行)、原稿時に漏れた素材修正。しかし「米」なら傍点は不要で、既述の通り初刊本で削除された。ところが『全集』では「おこめ」とルビが振られたが、意味不明である。

30 こんない、身体して(15・3)↓こんない、身体をして(11・15、二場六一三頁下一三行)、他に初刊本の「働ける身体をしながら」への修正例が後にある。

31 狸。どうもお婆さんは(15・9)↓狸、どうもお婆さんは(12・5、二場六一三頁下二二行)、登場人物の発言を示す句点が読点となった誤植。初刊本で修正。

32 それ御らんなさい。(15・18)↓それ御覧なさい。(12・11、二場六一四頁上六行)、漢字化だが、「御らん」はこの後もよく使われているので、誤植と思われる。

33 おい下さつても(16・5)↓おいで下さつても(12・14、二場六一四頁上一一行)、脱字が直された。

- 34 かけません(16・6)↓かけませぬ(12・14、二場六一四頁上一行)、誤植。初刊本で直された。
- 35 信用出来ないよ(16・19)↓信用出来ないのだよ13・6、二場六一四頁上二二行)、原稿内でも修正が多かった部分だが、校正時でも「のだ」と強調された。次の節で述べるが、〈信頼〉の主題に関わる変更。
- 36 狸奴又人を(17・7)↓狸奴又人を(13・9、二場六一四頁上二六行)、初出誌でルビ落ちの誤植。なお初刊本では「狸の奴」に変えられた。
- 37 だがね、妾達が(17・14)↓だがね妾達が(13・12、二場六一四頁下六行)、文脈上、読点欠落の誤植か。
- 38 存じておりますが、(18・10)↓存じてをりますが、(14・6、二場六一四頁下一七行)、誤記修正。
- 39 どれもちをつかなければ18・18)↓どれ米をつかなければ(14・11、二場六一四頁下二三行)、原稿執筆時に漏れた修正をおこなった。
- 40 疑ひ深い婆だな。だが(19・14)↓疑ひ深い婆だな、だが(15・4、二場六一五頁上九行)、誤植か修正か。
- 41 ちがいます(19・19)↓ちがひます(15・6、二場六一五頁上二二行)、仮名遣いの誤記が修正された。
- 42 まけないやうに(21・5)↓なまけないやうに(16・7、二場六一五頁下七行)、原稿にはなかった「な」の字が増えて単語まで変った珍らしい例。初刊本にも引き継がれたので、誤植か修正か判断が難しい。
- 43 もらいいます(21・7)↓貰います(16・8、二場六一五頁下八行)、他の例は平仮名なので誤植か。なお、既述の通り「い」は初刊本で「ひ」に改められた。
- 44 ものではない。あつても(21・15)↓ものではないあつても(16・12、二場六一五頁下一五行)、初出誌の句点欠落は行末のため。なお初刊本から読点に変えられた。
- 45 用心許りました。(21・20)↓用心許りしてゐました。(16・15、二場六一五頁下一八行)、正しく修正。
- 46 本当に、皆、だまされない用心を(22・1)↓本当に、皆。だまされない用心を(17・1、二場六一五頁下一九行)、句点は誤植と思われる。なお『全集』は「みんな」と不可解なルビまであるが、いかがか。
- 47 愛しもしないので(22・11)↓愛しもしないのでに17・7、二場六一六頁上一行)、文脈上修正と思われる。
- 48 殺さうも、生かさうも(23・10)↓殺さうと、生かさうと(18・2、二場六一六頁上二三行)、読点位置およ

び助詞の変更に修正か。なお初刊本ではこれに加え、読点が「生かさうと」の後ろに移された。

49 喰はば(24・9)↓喰はば(18・14、二場六一六頁下一行)、踊り字は残すのが通例なので誤植か。

50 婆のまづい肉を喰はしてやるか。(24・13)↓婆のまづい肉を喰はせてやるか。(19・3、二場六一六頁下一六行)、原稿執筆時の修正も多かったが、校正時でも「し」を「せ」に変えて使役表現に修正されたようである。

51 三、(25・2)↓三(19・5、三場六一六頁下一八行)、原稿には場を示す数字の下に読点があった。

52 さうか狸奴、そんないたづらをしたのか。(25・5)↓さうか狸奴。そんないたづらをしたか。(19・7、三場六一六頁下二〇行)、句読点および助詞の変更。原稿のままが最善のように感じられる。

53 あつ。(気が狂ふやうに)大変だ。大変だ。兎さん、兎さん大変だ。(27・4)↓あ、。(気が狂ふやうに)大変だ。大変だ。兎さん、兎さん、大変だ。(21・3、三場六一七頁下一三行)、感動詞および読点の変更。促音が踊り字に誤植された可能性もある。

54 あ、何と云ふことが(27・10)↓あ、何と云ふことが(21・8、三場六一七頁下一九行)、踊り字が一つ減ったが、誤植か修正結果かは微妙である。

55 四、(27・7)↓四(21・11、四場六一八頁上一行)、原稿には場を示す数字の下に読点があった。

56 (狸、上手に山がある、その山の端のこちらがはから草をかついで出てくる。兎も草をかついで下手からでてくる。後ろに草叢あり。)(27・18)↓(上手に山がある、狸、その山の端のこちらがはから草をかついで出てくる。兎も草をかついで下手からでてくる。後ろに草叢あり)(21・12、四場六一八頁上二行)、「狸」の位置と句点が正しく改められた。

57 お前さんも殺されたよ。(28・14)↓お前さんも殺されたよ、(22・6、四場六一八頁下五行)、前後の文から考えて、読点は句点の誤植と思われる。

58 だまされていたのだ。(29・3)↓だまされていたのだね。(22・11、四場六一八頁下一一行)、正しく修正された。さうともあの婆程、(29・4)↓さうとも、あの婆程、(22・12、四場六一八頁下一二行)、正しく修正された。恐ろしいこと許り考へてゐるのだ。(29・10)↓恐ろ

しいこと許り考へてゐたのだ。(22・15、四場六一八頁下一六行)、文脈上、修正と考えられる。

61 疑がはないことはない。(30・18) ↓疑がはないことはない(23・15、四場六一九頁上一〇行)、初出誌の句点欠落は行末のため。初刊本以後改められた。

62 五、(33・14) ↓五(26・2、五場六二〇頁上一行)、原稿には場を示す数字の下に読点があった。

63 前の場の草叢のうらに(33・15) ↓前の場の草叢の向ふに(26・3、五場六二〇頁上一二行)、表現修正。

64 六、(35・2) ↓六(27・10、六場六二〇頁下一七行)、原稿には場を示す数字の下に読点があった。

65 そのかはり、(35・4) ↓そのかはり。(27・11、六場六二〇頁下一八行)、文脈上、句点は誤植である。

66 兎、花をそなへ(35・12) ↓兎花をそなへ(28・2、六場六二二頁上一行)、読点はあった方が良く、誤植。

67 しかし御安心なさい。(36・16) ↓しがし御安心なさい。(28・15、六場六二二頁下七行)、誤植だが、初刊本で改められた。

68 ゐます。(37・1) ↓ゐます(29・3、六場六二二頁下一二行)、初出誌の句点欠落は行末のため。初刊本以

後改められた。

69 大得意です。(37・20) ↓大得意です(29・13、六場六二二頁上一二行)、初出誌の句点欠落は行末のため。初刊本以後改められた。

70 自分が思つたより(38・11) ↓自分で自分を思つたより(30・4、六場六二三頁上一〇行)、表現修正。

71 その心がちぢや、(39・4) ↓その心がけぢや、(30・11、六場六二二頁上一九行)、原稿の誤字を修正。

72 舟を監察したいが、(40・4) ↓舟を監察したいが、(31・6、六場六二二頁下八行)、ルビが付された。

73 でかつやうに(41・6) ↓で勝つやうに(32・3、六場六二二頁下二四行)、漢字に変えられた。

74 七、(41・13) ↓七(32・8、七場六二三頁上三行)、原稿には場を示す数字の下に読点があった。

75 眞中より少し下手に川が流れてゐ、(41・14) ↓眞中より少し下手に川が流れてゐ、(32・9、七場六二三頁上四行)、「少し」は誤植と思われる。

76 向ふ側の堤に柳の木があり、草叢がある。(41・15) ↓向ふ側の堤に柳の木があり草叢がある。(32・10、七場六二三頁上六行)、読点の省略だが、あった方が

良いように感じられる。

77 食ひ物の入れてあるらしい箱(42・3)↓食ひ物やお酒の入れてある箱(32・13、七場六三三頁上一〇行)、食べ物の箱の表現が修正された。

78 かいも棹も(42・5)↓かいも棹も(32・14、七場六三三頁上一二行)、傍点脱落の誤植。なお『全集』にも傍点はないが、なぜか「棹」にルビがある。

79 そうするかね(43・7)↓さうするかね(33・12、七場六三三頁下二行)、原稿の誤記が修正された。しかし既述の通り、後に元に戻ってしまった。

80 まあどうせ、(43・14)↓まあどうせ。(34・1、七場六三三頁下六行)、句点は初出誌の誤植。既述の通り、初刊本では「まあ」の後に句点が移り、『全集』もこれに倣っているが、いかがなものか。原稿の表記が最も自然に思える。

81 出してあげますから。(44・9)↓出してあげますから、(34・10、七場六三三頁下一七行)、修正された。

82 漕きまわる(45・1)↓漕きまわる(35・3、七場六三三頁下二六行)、送り仮名が修正された。なお「まわる」の誤記(「まはる」が正)は、この原稿から初出

誌、初刊本(62・3)、『全集』まで修正されていない。

83 棹をさし、舟を(45・17)↓棹をさし舟を(36・1、七場六二四頁上一五行)、読点脱落の誤植と思われる。

84 殺されなくてもすんだだらうがね。(46・14)↓殺されないでもすんだだらうがね。(36・13、七場六二四頁下三行、「だ」の脱落が省略か、微妙なところ。

85 酒がほしなら(48・15)↓酒がほしいなら(38・9、七場六二五頁上二二行)、原稿の誤記が修正された。

86 何に云つてゐるのだ。(48・17)↓何にを云つてゐるのだ。(38・11、七場六二五頁上二五行)、助詞修正。言うまでもなく「何」は「な」と読む。

87 長くはない。(49・4)↓長くはない(38・15、七場六二五頁下四行)、初出誌の句点欠落は行末のため。初刊本以後改められた。

88 (びつくりして立ち上り)。(49・7)↓(びつくりして立ち上り)(39・2、七場六二五頁下七行)、句点が正しく削除された。

89 何を云つてやがるのだ婆。(49・11)↓何を云つてやがるのだ婆。(39・4、七場六二五頁下九行)、ルビ脱落の誤植。

90 まぬけではないのだらう。(49・16)↓まぬけではないだらう。(39・6、七場六二五頁下二二行)、助詞が削られたが、誤植か修正結果か。

91 兎さん、兎さん、助けてくれ。(49・18)↓兎さん、兎さん。助けてくれ。(39・7、七場六二五頁下二三行)、句点に変ったが、読点の方が良く、誤植か。

92 助けてくれ、助けてくれ。(49・20)↓助けてくれ。助けてくれ。(39・8、七場六二五頁下一四行)、句点に変ったが、読点の方が良く、誤植か。

93 ひらいて(50・8)↓ひらひいて(39・11、七場六二五頁下一八行)、初出誌の誤植。初刊本で直された。

94 (幕) (一七、六、五) (50・10)↓(幕) (一七、六、五) (39・13、七場六二五頁下二〇行)、戯曲末尾の「幕」と脱稿日の表記の変更。読点以外はほぼ同じ。

以上、「かちく山」の原稿と初出誌との間の九四の異同を見てきた。ここでは、繰り返しになるので詳細は触れないが、初出誌での改変が比較的大きかった、表現や文脈に関わる次の五例を、代表的な異同として挙げておきたい。はじめが原稿の表記で、傍線部が異

同部分である。参考のため、『全集』の該当頁等を漢数字で示す。

5 あれが困つてゐる時に助けてやつた↓あれが川におちたのを助けてやつた(一場六〇九頁下二二行)
35 信用出来ないよ↓信用出来ないのだよ(二場六一四頁上二二行)

42 まけないやうに↓なまけないやうに(二場六一五頁下七行)

70 自分が思ったより↓自分で自分を思ったより(六場六二二頁上一〇行)

77 食ひ物の入れてあるらしい箱↓食ひ物やお酒の入れてある箱(七場六二三頁上一〇行)

これらの中では、35は筆者の解釈による〈信頼〉の主題に関わる異同である。このことは後にまた触れる。また、同様に詳細は省くが、以上の検討から、以下の二六ヶ所については、『全集』本文を矢印以降の表記に改めるべきであると筆者は考える。なお、引用と傍線は最小限にとどめる。

- 4 いけないね、↓いけないね。(二場六〇九頁上九行)
- 10 だけの事↓だけのこと(二場六一〇頁上二二行)
- 14 腹も立つが↓腹も立つが、(二場六一〇頁下九行)
- 19 くだされば↓くだされば、(一場六一一頁上一七行)
- 24 ましたか↓おましたか(一場六一二頁上九行)
- 25 戴けるか↓戴けるかと(二場六一三頁上六行)
- 26 思ふて↓思つて(二場六一三頁上八行)
- 28 おいで、↓おいで。(二場六一三頁上二四行)
- 29 米をついて↓米をついて(二場六一三頁上二四行)
- 32 御覧なさい↓御らんなさい(二場六一四頁上六行)
- 37 だがね↓だがね、(二場六一四頁下六行)
- 43 貰ひます↓もらひます(二場六一五頁下八行)
- 46 皆、↓皆、(二場六一五頁下一九行)
- 49 喰はば↓喰はゞ、(二場六一六頁下一一行)
- 57 殺されたよ、↓殺されたよ。(四場六一八頁下五行)
- 65 そのかはり。↓そのかはり、(六場六二〇頁下一八行)
- 66 兎花を↓兎、花を(六場六二一頁上一行)
- 75 少し↓少し(七場六二三頁上四行)
- 76 木があり↓木があり、(七場六二三頁上六行)
- 78 かいも棹も↓かいも棹も(七場六二三頁上一二行)
- 80 まあ、どうせ↓まあどうせ、(七場六二三頁下六行)
- 82 漕ぎまわる↓漕ぎまはる(七場六二三頁下二六行)
- 83 棹をさし↓棹をさし、(七場六二四頁上一五行)
- 89 のだ婆。↓のだ婆。(七場六二五頁下九行)
- 91 兎さん、兎さん。↓兎さん、兎さん、(七場六二五頁下一三行)
- 92 助けてくれ。助けてくれ。↓助けてくれ、助けてくれ。(七場六二五頁下一四行)
- 以上の要修正点は「仮名・漢字・ルビ等」が九ヶ所、「句読点」が一四ヶ所、「助詞等」が三ヶ所と、おもむね表記に関わる小さなものではあるが、それにしても、原稿と初出誌の比較検討によつて、定本である『全集』本文の問題点が、これほど多く指摘されることには、少々考えさせられるものがある。
- たとえば、武者小路特有の文体と見られることが多い、句点の読点化も、実際は誤植によることが多いこ

とがわかった。

それほどに、この原稿発表初期に生じた誤植や誤記は、ひとたび見逃されてしまうと、以後なかなか修正されにくいということがよくわかる。

五 原稿の執筆と修正

最後に、「かちく山」の原稿の中での修正点を検討する。

「かちく山と花咲爺」の原稿は紺色罫、相馬屋製のもので、二〇×二〇の四〇〇字詰用紙に黒ペンで書かれている。修正には、青黒ペン（主に前半部）や濃い青鉛筆（主に後半部）が使われている。本稿冒頭の図1からもわかるように、初め黒ペンで「かちく山」とタイトルを記した後、青鉛筆で「と花咲爺」の文字を挿入して総題とし、次に改めて「かちく山」と小題が記されている。「かちく山」の原稿は五〇枚で、「花咲爺」の方は三六枚だが、「花咲爺」はその末尾一枚が欠けている。

さて、「かちく山」の原稿用紙には、少なくとも

一三七ヶ所の修正があった。その内訳は、多い順に「表現」が七〇ヶ所で約半分、「内容」が三三ヶ所で約四分の一、残りが「素材」一三ヶ所、「敬語」一一ヶ所、「誤字等」一〇ヶ所であり、「表現」を中心に、おおむね言葉の補完、書き換え、簡略化などによる洗練などが多いが、その修正内容には、後述のように、作品の主題や情調などに関連する興味深いものも多い。

以後、原稿内での修正の意味を一つずつ考えていくにあたり、その表記の仕方については、まず、修正部分ごとに作品冒頭部から連番を付した。続けて、必要に応じてその周辺も含みながら、修正の打ち消し部分には打ち消し線を、加筆部分には傍線を付し、修正部分を引用した（●は判読が難しい文字である）。その後の（ ）内の数字は、該当する原稿の（頁・行）を表し、それに続けて『全集』当該箇所の場合、頁、段、行を漢数字で記した。

1 よく来て下さつくれた。(1・9、一場六〇九頁上七行)、婆から兎への敬語を正しく修正。

2 兎。一寸病氣をしてゐましたので。

婆。それはいけないね。お爺さんもお前さんのことを時々心配してゐなかつたよ。

兎。さうですか。お爺さんは(1・11、一場六〇九頁上九行)、兎への老夫婦の心配が追記されることで、両者の関係の強さが強調された。なお「いけないね。」の句点は初出誌で読点に変えられた。

3 十寸山までとんでゆくればすぐわかり山のは雑作もありませんから(2・2、一場六〇九頁下一行)、「山」の言葉と兎の動作がより詳しく表された。

4 用●心(2・9、一場六〇九頁下六行)、誤記修正。

5 あれに時々が困つてゐる時に(2・14、一場六〇九頁下一二行)、内容変更。なお初出誌では「あれが川におちたのを」と改められ具体化された。

6 爺さん狸をかついでしぱりつけひきづつて登場(2・18、一場六〇九頁下一五行)、狸を運ぶ様子が、より具体的に補足された。

7 さぞおくたびれだらうね。(2・20、一場六〇九頁下一七行)、婆から爺への敬語が付加された。

8 殺したつてす方が(3・13、一場六〇九頁下二五行)、爺の台詞。狸を殺すことが積極化された。

9 狸。兎さん、兎き(6・5、一場六一〇頁下一四行)、削除。狸の呼びかけが後回しとされた。

10 兎さん、久暫らくだね(6・10、一場六一一頁上三行)、久しぶりなどの表現が改められた。

11 私は迷つてゐるの病氣だつたさうだね。(6・10、一場六一一頁上三行)、狸の処遇から兎の安否に話が変えられ、後の兎の感謝の言葉に続く。

12 だがそのあと時がたつと(7・10、一場六一一頁上二二行)、「時」の言葉により時間性が強調された。

13 爺。(縄でもほどいてかごに入れてやらう。も裏にかごがあつたらう。あれをもつと楽にしてやらう。手足が

(手足が動けるやうにゆわいなほす)(8・16、一場六一一頁下一九行)、当初の「かご」や柵に閉じ込める構想が、後の修正に応じて変更された。

14 (狸をつれて退場) まもなく爺登場(9・1、一場六一一頁下二〇行)、最初はすぐに爺を場に戻すと書いたが、爺の不在時に狸を逃がした方が良いと忠告する兎と婆の会話が挿入されることになった。

15 爺。ゆわいつけてやつた。之から一つ柵をつく

- 47 中て逃げられないやうな丈夫な柵小屋をつくつてやらなければ。(9・20、一場六二二頁上七行)、ここで、「柵」が「小屋」に初めて変えられている。
 16 婆。 本当にもつと遊んでおいまで。(10・19、一場六二二頁上二二行)、表現の微妙な変更。
 17 兎。 それでもありがたいとうございます。(10・20、一場六二二頁上二三行)、「それでも云々」と辞去の理由を述べる前に、婆への敬意を表した。
 18 きよなゆそれなら失礼します。(11・5、一場六一二頁下一行)、爺婆への兎の礼儀正しさが強調された。
 19 狸があいつのやうだに信用が出来たらすぐよろこんで許してやるのだがね。第一つかまへもしなかつたらう。(11・14、一場六二二頁下八行)、内容補記。爺が狸を「信用が出来」ないことを兎と比較して強調、続けて狸の処遇に対する本心を述懐。
 20 裏庭。 そまつながんこな柵狸小屋がある。その内に狸がある。(12・4、二場六二二頁下一七行)、執筆当初は、後に凶行がおこなわれるこの場で、狸が粗末な「柵」の中にいる設定だったが、粗末ながらも頑丈な狸小屋へと変えられたことがわかる。
 21 婆さん、もち米をついてゐる。(12・4、二場六一二頁下一八行)、当初は「もち」をつくことにしていたが修正、この後も繰り返して直されている。
 22 おかげでまだおてんとう様をまだおがめるので、すから、(12・15、二場六一三頁上一行)、兎の言葉。「まだ」の位置が変えられている。
 23 あなたがたがい、おとしになつて働いて(13・9、二場六一三頁上一一行)、狸の阿諛が強調された。
 24 さうしたらどんなに身を粉にしても御恩がへしをして(13・13、二場六一三頁上一四行)、狸の阿諛が強調された。
 25 狸。 こんなに思つても見せられないのですかね。(14・2、二場六一三頁上二二行)、狸の嘘の強調。
 26 (もち餅米をつき出す)(14・7、二場六一三頁上二六行)、「もち」から「米」への修正。「餅」の漢字も見られ、修正跡が多い。
 27 そのもち米を私に(14・10、二場六一三頁下三行)、「もち」から「米」への修正。
 28 どうしてもち米をついて(14・11、二場六一三頁下四行)、「もち」から「米」への修正。「もち」には傍

点も付されていた。

29 さうすればもち米をついて上げます。(14・13、二場六一三頁下五行)、「もち」から「米」への修正。

「もち」には傍点も付されていた。

30 お爺さんにもわかるわけは(14・14、二場六一三頁下六行)、「狸の言葉。爺への敬意が正しく上げられた。

31 出してやみるまでは帰また入るつもりでも(14・16、二場六一三頁下八行)、「婆の台詞。「出てみる」と、狸を主体とする表現に変えられた。

32 だらうからなね(14・18、二場六一三頁下九行)、婆の台詞。「ね」によって柔らかな表現に変えられた。

33 (婆さん、まだたもち米をつく)(15・6、二場六一三頁下一六行)、「まだ」の「だ」の濁点を消して「また」と改められた。また、傍点が付された「もち」が「米」に修正された。

34 もち米をつくことが下手ですね。(15・9、二場六一三頁下二三行)、「もち」から「米」への修正。

35 私をに働かすのいでもらうことは(15・13、二場六一四頁上三行)、「狸の台詞。使役が依頼の表現に変えられ、婆の心情に付け入る表現となった。

36 妾も年齢とつて(15・16、二場六一四頁上五行)、より適切な漢字表記への変更。

37 ルビのみ「キネ」と記し、後からマスに「杵」と書いた上でルビを消去。(15・17、二場六一四頁上五行)、「漢字を忘れていたのであろう。

38 十つ●ひとをあんまり疑はう●ものではありません。(16・1、二場六一四頁上八行)、判読が難しいなお、既述の通り『全集』で「疑はう」は「疑ふ」に変えられた。

39 信用すれば二人●ともとくが(16・2、二場六一四頁上九行)、婆の説得のために「信用」の語を用いる狸の試みが補足された。

40 悪気のない人間ものを苦しめて(16・16、二場六一四頁上一八行)、「狸なので「人間」から改めた。

41 妾達もは信じ用したくても信じりれ用出来ないよ(16・19、二場六一四頁上二二行。以下43まで図2参照)、「妾達」を「は」で強調した上に「信」を「信用」に改めることで、爺婆の主體的な「信用」への思いが強められている。

42 それでも信じ用して下さらないから(17・2、二場

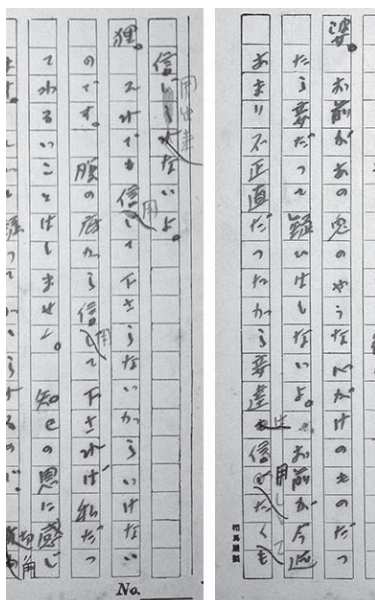


図2

- 六一四頁上二三行)、「信用」の語への変更。
- 43 腹の底から信じて用して下されば(17・3、二場六一四頁上二四行)、「信用」の語への変更。
- 44 折切角真心を(17・5、二場六一四頁上二五行)、漢字の誤りを修正。
- 45 正真面目な顔して(17・7、二場六一四頁下一行)、正直な、などと書くこととしたか。
- 46 時々心配してになります。(18・7、二場六一四頁下一五行)、「してしまひます」と書くこととしたか。
- 47 それなら縄でしばつてお爺さんに内証で出して

- やるから、(19・3、二場六一五頁上一行)、縄縛は続く台詞で小屋から出す条件として説明し直された。
- 48 縄をもつてとつてくるよ(19・12、二場六一五頁上七行)、「とつてくる」の方が明瞭であるためか。
- 49 之なら、もう逃げやうと思つても逃げるわけにはゆきません。(20・7、二場六一五頁上一七行)、謀反心を隠した狸が婆を安心させる言葉が追記された。
- 50 (狸、柵小屋から出る)(20・11、二場六一五頁上二二行)、「柵」から「小屋」への修正。
- 51 お前にもち米がつけるかね。(20・12、二場六一五頁上二三行)、「もち」から「米」への修正。
- 52 ルビのみ「キネ」と記し、後からマスに「杵」と書いた上でルビを消去。(20・13、二場六一五頁上二三行)、「杵」の漢字が苦手だったか。
- 53 (もち米をつく)(20・18、二場六一五頁上二六行)、「もち」から「米」への修正。
- 54 本当にさうすゐしてくれると妾も嬉しいよ。(21・8、二場六一五頁下九行)、改心を騙る狸の言葉を受け入れる、婆の人柄の良さが強調された。
- 55 他人●相手が損をしなければ自分が損する。(22・

- 3、二場六一五頁下二二行)、表現の簡略化か。
- 56 誰も知云つてもゐますし、知つてもいゝます。(22・8、二場六一五頁下二五行)、狸の弁舌がさらに狡猾になった。また、誤字が修正された。
- 57 婆。 そんなことはないよ。随分つけたね。(22・20、二場六一六頁上一五行)、兎の打算を主張する狸の言葉に婆の否定が加えられた。
- 58 婆さんの足をすくいたはず(23・6、二場六一六頁上一八行)、狸が婆の身体に与えた攻撃が補足された。
- 59 狸。(婆を足でふみつけ) 婆さん。(23・8、二場六一六頁上一二行)、ト書きで狸の行動を補足。
- 60 ルビのみ「キネ」と記し、後からマスに「杵」と書いた上でルビを消去。(23・10、二場六一六頁上一二行)、「杵」の漢字を追記。
- 61 あなたの云ふことをおとなしく聞く必要が(23・12、二場六一六頁上一四行)、狸の開き直りを追記。
- 62 お前は、よくもだましたね。(23・13、二場六一六頁上一五行)、狸への婆の非難が追記された。
- 63 もう正体かう云ふ処を見せた以上は(24・8、二場六一六頁下一〇行)、「かう云ふ処」によって、実体よりも行為そのものが指示されることになった。
- 64 (逃げようともがく、狸、うち殺す)(24・12、二場六一六頁下一四行)、婆の行動が補足された。
- 65 狸。 ざま見ろ。どれ、婆に化けて、やれ。俺の肉を食はうとした爺に十つこの婆のまづい肉を爺に喰はしてやるか。(24・13、二場六一六頁下一五行)、多くの削除加筆により狸の復讐の心理が補足された。
- 66 (婆さんの死骸を家のなかにもちこむ)
「暫くして爺さん登場、狸婆さんにばけて出迎
あ」
- 狸。 お帰りなさい。
- 爺。 帰つた。もちが立派につけたな。
- 狸。 つけました。
- (狸、すぎがあつたら爺さんを殺さうと)(24・16、二場六一六頁下一七行)、二場末尾の削除。完成稿の爺の帰宅は三場冒頭だが、削除部分最後のト書きでは、後の展開と異なる内容が書きかけられている。
- 67 (家のうち、爺さん狸すでに婆さんにばけてゐる。二人御馳走を食つて膳にすわつてゐる)(25・4、三場六一六頁下一九行)、三場冒頭のト書き。爺が食う

場面から、二人で膳に着く場面に改められた。

68 おかげで狸ぢるが(25・6、三場六一六頁下二一行)、仮名の修正。

69 もう七六十二になるさうですよ。(25・11、三場六一七頁上一行)、狸汁の材料となった婆の年齢設定が「七十」から「六十二」に若く変えられた。

70 どれど馳走(爺一口食べやう)になるかな。

(爺さん箸をとらうとする。戸をたゝくものがある)もつてゆかうとする。

爺。(やめて)誰だ。(25・14、三場六一七頁上三行)、多くの加筆や削除により、爺がかりうじて婆汁を食わなかった過程が苦心して書かれている。

71 婆の汁を食ったお爺さん。(26・10、三場六一七頁上一八行)、「婆の汁」という生々しい表現が抑制され、残虐性が緩和された。

72 狸。(外で)婆を食った、爺。椽の下を御らん。(26・16、三場六一七頁上二六行)、ト書きで狸の声の出所を明示。また、縁の下の指示を削除して、婆を食ったことの囃したてに変えられた。なお、原稿には「婆」(ばばあ)とルビがあり、初出誌には引き継がれ

ものの、総ルビの初刊本からパルビの『全集』収録の過程ですべて消されてしまっている。

73 婆さん。婆さん。婆さん。(26・18、三場六一七頁下五行)、「婆さん」を追記し爺の狼狽が強調された。

74 狸。(外で)椽の下を御らん。婆の骨は椽の下。婆を食ったぢ、い。(26・19、三場六一七頁下七行)、縁の下のことは後に指示することにして、囃したてに変えられた。

75 あつ。(気が狂ふやうに)大変だ。大変だ。兎さん、兎さん大変だ。(27・4、三場六一七頁下一三行)、縁の下の遺骸を見つけた爺の驚嘆を強調。なお、「あつ。」は初出誌以後「あゝ。」に変えられた。また二度目の「兎さん」の後に初出誌から読点が挿入された。

76 お覚えてゐろ! あゝ、何と云ふことが出来たのだ。(27・10、三場六一七頁下一九行)、爺の歎きの言葉が追記された。なお「お覚え」の「お」「あゝ、」の二つ目の「ゝ」は、初出誌以後削除された。

77 (狸、上左手に山がある、その端のこちらがはから草をかついで下り出てくる。兎も草をかついでおり下布手からでくる。後ろに草叢あり。)(27・18、

四場六一八頁上二行）、ト書き、兎と狸が反対方向から出くわす設定に改められた。なお初出誌以後「狸」の語は読点を省かれて「その端」の前に移された。

78 兎。随分暫らくお目にかゝらなかつたね。少しやすんで話してもしやう。

狸。あ、家に引こんであたよ。やすもう。(二人すわる)(28・4、四場六一八頁上八行)、再会の挨拶から兎の誘いに改められ、同時に狸が蟄居していたという巖谷本等の原話の記述が削除された。

79 君は僕の命の恩人と云つても(28・18、四場六一八頁下八行)、兎が狸の恩を着てみせる言葉が加えられた。なお、既述の通り『全集』のみ「恩人」の後に「だ」が加えられた。

80 兎。それなら僕はお人よしだまされてゐただ。(29・2、四場六一八頁下一行)、狸の意に沿った強い表現に改められた。なお、初出誌から末尾は「だね。」に改められた。

81 兎。さうかね。お前さん君もあの婆さんにはその点叶はないかね。(29・6、四場六一八頁下一四行)、「お前さん」は狸から兎への呼称。また「その点」

の追記によって、嘘をつく悪さが明示された。

82 狸。それは君はお人よし正直ものだからさ。(29・20、四場六一八頁下二三行)、兎を小馬鹿にした言い方から、おだてるような言い方に改められた。

83 僕を殺さうと思つてゐる人間を殺してくれた恩人なのだ。●れで見てもこの世に悪いことを●僕は君に逢つて(31・4、四場六一九頁上一四行)、長くなりそうな兎の台詞を切り替えようとしたか。

84 さもなければいつまでも恩人を憎んでゐる(31・6、四場六一九頁上一五行)、憎しみの長い時間が補われたが、兎の内心や読者には痛快な皮肉でもある。

85 (活動前の場の上手に草叢のうらに狸再び姿をあらはし上手にある山の端をがでてゐる狸はそのうしろへとぼく狸が歩いてゆく。のが草叢を通して見える。兎おいつく)この十節活動写真でもよし(33・15、五場六二〇頁上二行)、ト書きの修正が夥しい。始めに「活動」と書きかけたのは、題名通り火を付ける場面を劇場で演ずるのは危険であるためか。なお「うらに」は初出誌以後「向ふに」に変えられた。

86 兎。狸さん、狸さん。あなたはそつちにゆくの

- ですか。それなら一緒に帰ります。 (33・17、五場六二〇頁上四行)、狸を誘う様子が詳細化された。
- 87 狸。安心したよ。からさ。別に不思議はないよ (34・3、五場六二〇頁上一行)、爺の病臥を聞いて元気になった狸の空威張りする様子が補われた。
- 88 (兎。狸の油断を見て火うち石を出して、かちくやる) (34・4、五場六二〇頁下一行)、ト書きで、兎が狸に注意を払う様子が付け加えられた。
- 89 (狸山のかげにかくれる、火がもへ上る) 狸。あつ、あつ、あつ、あつ。大変だ。大変だ。火がついたよ。助けてくれ。助けてくれ。ト書きまわ逃げまわる (34・15、五場六二〇頁下一〇行)、狸の姿が隠れてから火が上がる設定に改められ、余分な台詞と行動が削られた。舞台上の安全のためか。あついでせう。さぞあついでせう。 (34・19、五場六二〇頁下一五行)、狸への皮肉が補われた。
- 91 婆さんまんもさぞよろこんでゐるだらう。 (35・15、六場六二二頁上三行)、爺の台詞だが亡妻への敬称「婆さま」と迷い、結局イキとなった。
- 92 たゞお爺さんがあなたがどんなにお淋しいかと (35・17、六場六二二頁上四行)、兎が爺に「あなた」と二人称を使った例。厳粛な場での対話ゆえか。
- 93 つい四五日前こないだの話ぢやないか。 (36・14、六場六二二頁下三行)、兎が狸の背中に辛子を塗った日がおぼめかされた。
- 94 今度こそあのどろ舟で狸奴を (36・16、六場六二二頁下八行)、危険な名の「どろ舟」に改められた。
- 95 逢ふ度においまだ出来ないかときい催促します。 (37・6、六場六二二頁下一六行)、狸の呼びかけが省かれた。また漢字が補われた。
- 96 自分のやうな人間利口なものが、私兎のやうな馬鹿にだまされる (37・10、六場六二二頁下二行)、修正過程よく見ると人間、利口、私、馬鹿など擬人化の技巧上の工夫がよく窺われる修正例である。
- 97 自分にと私のやうなでも私のやうなものにどうして狸をだます力があるのかと (38・8、六場六二二頁上八行)、兎が自省する表現が修正されている。
- 98 爺。狸を馬鹿にしてはいけないよ。いざとお前のことだから安心してゐるが、 (38・17、六場六二二頁上一四行)、爺の心配を表す流れが削除された。

- 99 注意してやります。手ぬかりは——自分でもこわい
 はどうまくゆくので、(39・1、六場六二二頁上一七
 行)、兎の言葉。自信よりも不安が強調された。
- 100 時は十充十充分にあるのだから。時と云ふものは
 無理するのが嫌いだから。少しでも無理すると逃し
 てしまうよ。(39・8、六場六二二頁上二二行)、「充分」
 の表記に悩んだ挙句、時間の量からタイミングの詩
 的なアドバイスに変えられた。
- 101 何処までもあいつの味方のやうな顔してあませ
 う。(39・11、六場六二二頁上二四行)、兎の台詞。指
 示対象が明瞭化された。
- 102 爺。わしも今日舟を監察したいが、(40・4、六
 場六二二頁下八行)、後の「明日」に対応。なお「監
 察」には初出誌から「けんさ」とルビが付された。
- 103 明日は天気だつたらきつとあの柳の太木のうし
 ろにやあたりにかくれて、(40・6、六場六二二頁下九
 行)、この前に明日の天候を氣にする会話があり、そ
 れを引き継いだ修正か。
- 104 さうすれば私もどんなに氣丈夫か知れません。
 (40・9、六場六二二頁下一二行)、兎、人稱を省略。
- 105 爺。お婆さんにそのことを云つて上げてやつて
 くないか。(40・11、六場六二二頁下一四行)、兎に
 対する婆への敬体が常体に変えられた。
- 106 爺。たつしや手ぬかりがないやうにしろ。(41・
 2、六場六二二頁下二二行)、兎の無事を願う別れの
 挨拶から復讐の成功への注意に変えられた。
- 107 明日お前が負傷^{けが}一つしないでかつやうに祈つて
 るよ。(41・6、六場六二二頁下二四行)、復讐成功
 が付加された。なお初出誌以後「で勝つ」と漢字化。
- 108 兎。(思はず平伏し) ありがたう御座います。
 (41・8、六場六二二頁下二五行)、爺が我が身を心配
 してくれることへの兎の感謝の行為が補われた。
- 109 兎。はい。(立ち上り涙ぐみながら退場)(41・10、
 六場六二二頁上一行)、兎の感激が補われた。
- 110 (川岸、舟真中より少し下手に川が流れてゐ、こち
 らがはが上手が河原の岸になつてゐて其処に小さい
 舟が二艘並んでゐる。兎が其処で働いてゐる。下手
 向ふ側の堤に柳の木があり、草叢がある。) 其処に爺
 さんがかくれてあてうまいかくれ場があつて爺さん
 がかくれてゐる。(41・14、七場六二三頁上四行)、ト

書きの夥しい修正により、舟や兎、木や草叢の配置が記されている。

111 (食ひ物の入れてあるらしい箱を泥舟にのせる)

(42・3、七場六二三頁上一〇行)、食物ではなく容器が表現された。しかし初出誌以後「食ひ物やお酒の入れてある箱を泥舟にのせる」に変えられた。

112 竿かいも棹もこつちの方が少し上等だから、(42・5、七場六二三頁上一二行)、「竿」の字が消され權と棹に改められた。なお「かい」の傍点は初出誌以後削除。本文には漢字表記も見られる。

113 狸。よし。あ、い、氣持だ。(44・14、七場六二三頁下二行)、後から「い、」が補われた。

114 あの前柳の前に舟を棹をさしませう(45・2、七場六二四頁上二行)、換喩表現に書き換えられた。

115 兎。い、氣持ですな。

(二人かい權で舟をこぐ)(45・8、七場六二四頁上七行)、ト書きで兎と狸の動作が補われた。

116 (棹をさし、舟をうかべむすびつける)(45・17、七場六二四頁上一五行)、表現が洗練された。なお「さし」の後の読点は初出誌以後省かれた。

117 兎。(盃を出し) 私にも一杯下さい。(45・19、七場六二四頁上一七行)、兎の行動が補足された。

118 狸。お前さんの舟には酒をはないのか。起きるのが面倒だから(45・20、七場六二四頁上一八行)、誤

字修正と狸の酔った様子の追記。

119 お前さんは婆さんを殺したことを何とも思はないか後悔したことはありませんか。(46・5、七場六二四頁上二二行)、「後悔」で狸の非が追及された。

120 あんな悪い婆はくたばあらず方が(46・7、七場六二四頁上二三行)、狸の悪行の意図が強調された。

121 この殺すものは殺しどくだよ。(46・11、七場六二四頁上二六行)、誤記か。

122 婆さんを殺さなかつたらお前さんは死殺されな〜いでもすんだだらうがね。(46・14、七場六二四頁下三行)、殺す行為が明瞭化。なお、既述の通り「すんだだらう」は初出誌以後「すんだらう」に変えられた。また『全集』では「殺されないで」と「も」が脱落している。

123 狸。婆さんをころしたつて、(46・16、七場六二四頁下五行)、狸からは敬称不要のため削除。

- 124 (舟は益々とける。)(兎は狸の舟より●自分の
舟を少しはなす)し棹をたてて舟をゆわく(47・
14、七場六二五頁上六行)、兎の舟の様子を補記。
- 125 狸。●(冗談風に)何が馬鹿だ。●(47・18、七
場六二五頁上一〇行)、狸の慢心の様子が補われた。
- 126 狸。あは、。この酒がをやらがのめないのが
そんなに口惜しいのか。(47・20、七場六二五頁上一
二行)、狸の吝嗇から兎の不満に改められた。
- 127 婆さんが、お前をゆれに●迎に來なさつたよ。(48
・3、七場六二五頁上一四行)、「迎」は死を意味する。
128 狸気がつき、びつくりし一寸おどろき(48・13、七
場六二五頁上二二行)、狸の驚きはまだ小さい。
- 129 婆さんの讐をうつてやるから(48・18、七場六二五
頁上二六行)、兎の台詞なので婆への敬称が補われた。
130 あは、。冗談はよせよ。(間)お前がは本気で俺
を殺さうと云ふのか。(48・19、七場六二五頁下一行)、
表現。狸の強気な言動が強調された。
- 131 兎。あやまあさう思へる間思つて(49・2、七場
六二五頁下三行)、何か別の言葉を書きかけたか。
132 お前はもの命はもう長くはない。(49・3、七場六
二五頁下四行)、「命」を補って明瞭化された。
- 133 (姿は見へず婆さんの声色で)(49・5、七場六二
五頁下五行)、声で婆の怨霊が演じられる。なお「見
へ」は『全集』では「見え」に修正された。
- 134 誰だ！今の声の主は。(49・8、七場六二五頁下
七行)、「声の主」は爺だが「声」なら婆らしくなる。
135 許してくれださい。許してくれださい。私がわる
かつう御座いました。私がわるかつう御座いました。
(お辞儀する)(49・13、七場六二五頁下一〇行)、不
利を悟った狸の言葉と動作に敬意が加えられた。
- 136 狸。(おほれながら)わるかつた。わるかつた。
助けて、助けて。て！(おほれさうになりやつ
と兎の舟に手をかける)兎さん、兎さん、どす
か許しておくれ、私がわるかつた。
- 137 兎。氣の毒だが、もうおそすぎる。(50・2、七
場六二五頁下一七行、**図3**参照)、狸の謝罪と抵抗、
兎の拒絶の言葉を削除し、命乞いの言葉が残された。
兎、懼をふり上げる。同時に爺さん柳の下に(50・
7、七場六二五頁下一八行)、爺の動作の補足。「見
へ」は『全集』では「見え」に修正された。

以上、「かち／＼山」の原稿用紙の二三七の修正部分
 「表現」七〇ヶ所、「内容」三三ヶ所、「素材」一三ヶ
 所、「敬語」一一ヶ所、「誤字等」一〇ヶ所）を見てき
 た。前述のように、その修正内容には、作品の主題や
 情調などに関連する興味深いものも多いので、次にそ
 の内容を整理したい。

修正全体の中で七〇ヶ所と最も多い「表現」の修正
 は、たとえば3の「一寸とんでくればすぐわかり」を
 打ち消して「山までとんでゆくのは雑作もありません」
 （2、2、一場六〇九頁下一行）のように、「山」の言葉

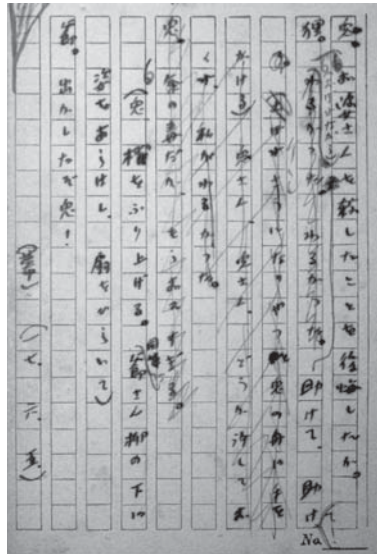


図3

と兎の動作がより詳しく表されたような例や、100の「時
 は充分にあるのだから」を「時と云ふものは無理する
 のが嫌いだから」（39、8、六場六二二頁上二一行）へ
 と時間の見方を変えた例など、興味深い修正が数多く
 ある。

こうした表現の修正、つまり、ちょっとした言葉の
 変化によって、読む者の抱くイメージが大きく変り、
 こうした一つ一つの修正を丹念に追跡していくと、言
 葉が持つ魅力の可能性、広がりや、それをひたすら追
 求していく作家の創作の楽しみがよく想像できるもの
 で、原稿研究の醍醐味と言える。

また、二三ヶ所にわたる「素材」の修正は、「もち」
 から「米」への変更が九ヶ所 21、26、29、33、34、
 51、53、また「かこ」等から「小屋」への変更に関わ
 るものが四ヶ所（13、15、20、50）である。

これらは、原稿執筆中に素材の変更がおこなわれた
 もので、たとえば、13の爺の台詞の「（縄でもほどこい
 てかごに入れてやらう。も裏にかごがあつたらう。あれ
 をもつと楽しんでやらう。手足が（手足が動け
 るやうにゆわいなほす）」（8、16、一場六一一頁下一九

行)の削除は、当初の「かご」や柵に閉じ込める構想が、後の修正に応じて変更された例で、武者小路は当初、爺に捕らわれていた狸を「小屋」ではなくて「かご」に入れておこうと考えていたことがわかる。その痕跡は本文にも一部残されており、「しばらくついたり、かごに入れたりすると」(二場六一頁下二四行)などとなる。また、執筆当初は、捕らわれた狸の横で婆が搦いていたのは「もち」だったが、これも初出時までには、すべて「米」に訂正されている。

次に、三三ヶ所にわたる「内容」の修正の中には、「かち／＼山」という復讐の昔話から、〈信頼〉の主題や〈悲壮を帯びた歓喜〉という情調を持った近代の童話劇への再生という筆者の解釈に深く関係する部分が見られる。第一はその主題の明確化であり、第二はその残虐性の緩和である。

第一の〈信頼〉の主題に関する「内容」の修正は、五ヶ所(19、39、41、43)である。たとえば19で、爺の台詞を「狸があいつのやうに信用が出来たら」(11、14、一場六一二頁下八行)に修正することで「信用」の語を明示している点、また41では婆の台詞を「妾達

は信用したくても信用出来ないよ」(16、19、二場六一四頁上二二行)に修正することで爺婆の主體的な「信用」への思いが強められ、それに答える狸の台詞に42「それでも信用して下さらないから」、43「腹の底から信用して下されば」(17、2、3、二場六一四頁上二三、二四行)と「信用」の語に修正された点などが挙げられる。本稿第二節で述べた初刊本と『全集』間の異同8、13、18、また第四節で述べた原稿と初出誌間の異同35なども、これに関連する異同であった。

第二の残虐性の緩和に関する「内容」の修正は、三ヶ所(70、71、136)である。もともと昔話の「かち／＼山」には、婆汁や狸への容赦ない復讐などの残虐な場面が含まれるが、原稿修正の跡からは、武者小路が、それらの場面の描写に悩んだ様子が見て取れる。たとえば70の爺が婆汁をかううじて食べなかつた場面(25、14、三場六一七頁上三行)では、多くの加筆や削除により、その危うい過程が苦心して書かれている。それに続く71の「婆の汁を食つたお爺さん」から「婆を食つたお爺さん」(26、10、三場六一七頁上二八行)への変更によって、残虐性を緩和した例などがある。

また、復讐が果たされる作品末尾では、執筆当初の泥舟で溺れゆく狸の謝罪と抵抗、それに対する兎の拒絶の言葉がいったん詳しく書かれた後で抹消され、136「(おぼれながら) 助けて、助けて！」(50・2、七場六二五頁下一七行) という命乞いの言葉だけが残されることとなった。

これらの残酷性の緩和は、もともと信州白樺の教師赤羽王郎に慫慂されて書かれた童話劇としての、児童を中心とする読者や観客の心情への配慮によるものと考えられると同時に、特に作品末尾の描写の簡略化の部分からは、復讐という行為そのものよりも、逆に、このような行為に至らざるを得なかったという(悲壮を帯びた歓喜)の情調の表現を意図したことによるものとも考えることができる。

「内容」の修正の中には、これらの他にも興味深いものが幾つかある。78「随分暫らくお目にかゝらなかつたね」という兎の台詞に対する狸の返答の中から「家に引こんでゐたよ。」(28・4、四場六一八頁上八行) という言葉が抹消されているが、この修正は、狸が蟄居していたという巖谷本等原話の記述を用いずに、狸の

内心のリアルな表現に努めた痕跡と認められる。

また、89で卜書きから「狸山のかげにかくれる、火がもへ上る」を追記し「ころげまわ逃げまわる」を削除した例(34・15、五場六二〇頁下一〇行)からは、上演時の舞台上の安全への配慮と考えられ、興味深い修正と言える。

さて、以上の検討から、『全集』の本文については、以下の一ヶ所を改めるべきであると筆者は考える。これも繰り返しになるので、詳細は省く。はじめが『全集』の表記で、引用と傍線部は最小限にとどめる。

72 婆を食つた、爺。ばあ婆を食つた、爺。ぢい(三場六一七頁上二六行)

六 おわりに

本稿をまとめるにあたり、まず現存する武者小路の自筆原稿について触れておく。著作数の多い武者小路ではあるが、関東大震災、および戦時中の空襲による焼失や散逸などにより、現存する原稿数はそう多くは

ない。これらは、武者小路実篤記念館（「ある青年の夢」ほか約二三〇タイトル）、新しき村美術館（「詩九つ」ほか約二九〇タイトル）、神奈川近代文学館（「その妹」ほか約四〇〇タイトル）、川内まごころ文学館（「或る男」ほか一二タイトル）、日本近代文学館（「秀吉と曾呂利」ほか一〇タイトル）、またほかにも、三鷹市教育委員会、清春白樺美術館、我孫子市白樺文学館などに保管されている。

武者小路の用いた原稿用紙については、主に武者小路実篤記念館所蔵の武者小路実篤の原稿をもとに、その用紙を時系列順に並べると、おおよそ次のようになる。

- 1 東京相馬屋製（紺野）、「道学者」（明治41年執筆）
　　「お目出たき人」（明治44年刊）等
- 2 喜多川製（紺野）、「その妹」（大正4年発表）
　　「或る青年の夢」（大正5年発表）等
- 3 相馬屋製（紺野）「かち／＼山と花咲爺」、（大正6年発表）等
- 4 大野紙店製（紺野）、「雑感」（大正10年発表）
- 5 白樺原稿用紙（朱野）、「神の国」（大正10年発表）

等

- 6 新しき村出版部原稿用紙（グレー野、赤野）、「或る男」（大正10～12年発表）
　　「文藝と人生」（大正15年発表）等

- 7 丸善製・MARUZEN（焦茶野、黄野、オレンジ野、赤茶野）、「雑感」（大正13年発表）
　　「愛と死」（昭和14年発表）等

- 8 ATHENA（焦茶野）、「母と子」（昭和2年発表）
　　無車用紙（焦茶野）、「楠木正成序」（昭和17年発表）
　　「幸福について」（昭和19年発表）等

- 10 MARUZEN（オレンジ野・黄野、焦茶野）、「宗忠の宗教序」（昭和27年発表）
　　「村のよろこび」（昭和49年発表）等

これらのほかにも、一九四五（昭和20）年頃を中心に、『文藝』、筑摩書房、岩波書店などの雑誌や出版社の用紙が使われたり、後年にはコクヨ製が使われた原稿も残されている。また、変ったものとしては、一九二三（大正12）年に刊行が始まった芸術社版『武者小路実篤全集』の束見本が日記帳代わりとして用いられた「気まぐれ日記」（大正15年刊）の原稿がある。

さて、本稿では、原稿研究の枠組みを超えて、原稿から個人全集に至る、武者小路實篤テキストの生成の問題を考察してきた。

まず、理想的な定本、すなわち『全集』に収録されるべき本文の修正を要する場所は、第一節で四ヶ所、第二節で五ヶ所、第三節で二六ヶ所、第四節で一ヶ所の、計三六ヶ所に及ぶことがわかった。

次に、原稿から初刊本に至る修正や異同の追究によって、それらの中には、童話劇「かち／＼山」の主題や情調と深い関係があることがわかった。また、それら一つ一つの追究の過程で、武者小路のテキスト生成の意義と実態も明らかになった。

この「テキスト」について最後に記したい。そのエッセイなどを読むと、武者小路は原稿を一气呵成に書き、推敲もしないというイメージが強いものだが、自筆の原稿に残された様々な痕跡には、武者小路の思考の跡が記されていたことがわかった。

しかし、痕跡からその思考の跡を辿り直そうとしても、完全な再構築は困難であることも、ここまでの検討の過程でわかった。^{*5}とは言い、少し考えてみれば、

その困難は原稿用紙に向かい合って、言葉との際限ない格闘を繰り返し続けていた作者自身にとっても、違いなく当てはまることなのだ。

筆者はここまで、独自の解釈に基づいて、理想の定本を追究してきたが、このように考えてみれば、本稿での考察とその結論自体にしても、様々に異なる文化的コンテキストの中にある、多くの読者の解釈の一つとして生み出された、多様なテキストの一つと言わざるを得ないであろう。^{*6}

注

*1 図の原稿用紙三行目の「かち／＼山」の小題の下に「實篤」の署名とともに記された「昭和二十七年九月十三日」の日付は、著者によるこの原稿の確認日のものと思われる。

*2 詳細は拙稿「武者小路実篤「かち／＼山の世界」——〈昔話〉から〈童話劇〉へ——」〔『文教大学文学部紀要』25・2、平24・3参照。

*3 たとえば、秋葉直樹「武者小路実篤の読点（一）」、および「同（二）」〔『国学院雑誌』81・1および2、昭55・1および2）など。

*4 巖谷による原話には「さて兎は自分の穴へ帰て、狸の

様子^{さま}を覗^{のぞ}みますと、狸はお爺^{おや}さんの処を逃げてからは、
流石^{さすが}に見付^{みづ}かるのを恐^こがつて、穴の奥にはかり引込^{ひっこ}で居
ますから、何しろ表^{おもて}へ連れ出さなければ不可^いと、次の日
天気^あの好いのを幸^{さいは}ひ、其穴へ尋ねてゆき」などある。（巖
谷小波『日本昔噺』、明28・5、博文館。引用は『東洋文庫』
六九二、平13・8に拠る）

*5 秋山豊は『本文作成の問題点——岩波書店の『漱石全集』
の場合』（日本近代文学館編『近代文学草稿・原稿研究事
典』平27・2、八木書店、52頁）で、個人全集の本文確定
作業の困難さを述べて興味深い。

*6 松澤和宏は『外国文学の研究との違いについて』（5と
同書、96頁）で、フランスの生成論の現状を紹介しつつ、
これからの原稿研究について「作家の下した価値判断」
と研究者のそれを「照らし合わせて対話を試みながら吟
味」し、「理解から評価へと解釈を能動的に深め」ること
の必要性を述べて興味深い。

本稿および前掲の『近代文学草稿・原稿研究事典』執筆
のための原稿資料の調査、閲覧に当っては、調布市武者
小路実篤記念館、および同館の伊藤陽子氏、福島さとみ氏
の大きな助力を仰いだことを、ここに謝して記します。